

◆ 少人数だからこそ ◆



“その学校”の教育目標の一つにこうある。

“ふるさとを愛し人を愛し、志をもって社会に貢献する人材の育成”
「ふるさとを愛」する・・・、素敵な響きだ。

2年ぶりに、全国の高校文化部関係者が一堂に会して島根県松江市で開催された全国高等学校文化連盟研究大会。演劇のワークショップでは、3人の生徒の皆さんが演ずる実際の舞台を見ることができた。彼らは「島根県立三刀屋高等学校掛合（かけや）分校」、冒頭に触れた“その学校”の「演劇同好会」の皆さん。キャストが3人と少人数であり、一人で何役もこなしながらの演技となる。ボイスパーカッション等も取り入れたそのパフォーマンスには圧倒された。最後に彼らから発せられた、「満員のお客さんの前で演劇がやりたい」という叫びは今も胸から離れない。

学校HPを拝見すると、全校生徒は69人（5月1日現在）。このパフォーマンスに前後して、演じた生徒さんにインタビューした動画が流れた。ふるさとへの想いがひしひしと伝わる温かなもの。新学習指導要領にも示される「家庭や地域社会との連携及び協働」が求められるこれからの高校の姿の一つの理想を見るような思いがした。

ところで、この10月に開催された全日本吹奏楽コンクール中学校の部で、13人での初出場となった鹿児島県奄美市の朝日中学校吹奏楽部。規定によると中学校部門の参加人員は「50名以内」であり、「各都道府県、地方予選を通じて選ばれた代表30校が出場した。」中で「奏者30人以下は、（中略）わずか4校。20人未満は朝日中だけだった。」（10月26日付け 南海日日新聞web版）とのこと。県予選を通過するだけでもハードルはかなり高いけれども、この全国大会で、結果は見事銀賞。

全国的な少子高齢化の流れの中、部活動をめぐる各学校の模索が続いている。少人数で活躍しているこのような事例は、「教育活動の一環」としての部活動の在り方を考える際に大きな視座を与えてくれるものとなった。